５０．森田　隼人氏（シャボン玉石けん株式会社 代表取締役社長）

「九州第二都市である自負を持ち、委縮することなく、人口減少を食い止め、ふたたび『活気あるまち』へ」

森田　隼人（もりた　はやと）
北九州市出身。
専修大学経営学部経営学科卒。
大学卒業と同時にシャボン玉石けんへ入社。関東エリアの卸店、百貨店、スーパー、ドラッグストアチェーンなどへの営業に携わった後、取締役副社長などを歴任。
2007 年に代表取締役社長に就任。

「『環境』はしっかりと引き継いで」

北九州市と言えば、公害時の「七色の煙」で覆われた空、「死の海」とも表された洞海湾が劇的に改善し、青い空、青い海を取り戻した歴史でしょう。あの対比は対外的にもインパクトがあり、周囲からの評価が高いと感じます。

このように「環境」の取組は、北九州市にとっての大きなブランドであり、しっかり引き継いでいくべきだと考えています。当社も、そういった意味で親和性が非常に高く、その北九州市の環境関連企業の一つとして認知いただいており、就職先としての関心が高まっていると感じています。まずは知ってもらうということが大事だと思うので、この現状は、北九州市をはじめ、世の中が変わっていく原動力として、環境ブランドの発信に貢献できているのではないかと思っています。きっと北九州市の企業でなければ、「無添加石けん」の製造・販売を行うことも、環境負荷の低い「石けん系消火剤」の誕生もなかったでしょう。

一方で、「環境」だけでは食べていくことは難しい面もあり、まちの活性化のためには、プラスαの工夫が必要でしょう。

そのような中で、北九州市の特徴としてよく言われるのが、他所から来た人を受け入れることに寛容であることです。

例えですが、「北九州に来る支店長は２度泣く」と言われます。一度目は転勤先としての「心配」、二度目は離れたくない「名残惜しさ」で泣くそうです。排他的な気質でないことは、まちの活力を上げていくために必要だと思います。

「強みをいかし、発信することが必要」

ポテンシャルとして、生かせる部分はたくさんあるものの、生かしきれていない。北九州市には BtoB の企業が多いからか、発信力が弱いように感じています。積極的に発信すれば、よりうまくいく可能性があるのではないでしょうか。また、新幹線は小倉駅に全て止まり、空港もあり、港もありますが、このような環境を生かしきれていないように思います。

今後、将来性を感じるのは、物流拠点としての北九州空港でしょう。東京と上海の中継点としての地理的位置づけもあります。より、活性化するには、福岡ともうまくやっていく必要があり、北九州空港は第二福岡空港などとして、一緒に成長していけばよいのではないでしょうか。

また、北九州市は、医療・福祉が充実しています。加えて、各区それぞれに立派な施設があり、「子育てしやすいまち」№1 になっている

のも長所です。「高齢者の住みよいまち№1」はわざわざ表現せず、若者の住みやすいまちが、結果的に高齢者が住みやすいまちになれば良いと思います。

その他、BCPなどの観点でも、ハザードマップで見て安心な立地であり、災害に強く、水も豊富にある、交通インフラも充実しているということは重要で、企業誘致においてもメリットがあると思います。

加えて、北九州市役所の職員の方には熱意があって、他自治体とは違うという印象を持っています。このような行政のスタンスも非常に大事ではないでしょうか。

「魅力的な地元企業へ、活気あるまちに」

再び「活気あるまち」になってほしいという思いがあります。大学から戻ってきて、魚町商店街を歩く人が減っていると感じました。稼ぐことができれば人も来ますし、満足度も上がってきますので、ぜひ達成してほしいです。

そのためにスタートアップと地元企業の技術力を掛け合わせるということが必要です。北九州市に大学がいくつもあるが、大学生の多くは卒業後、市外に出て行ってしまっています。地元企業が魅力的に映っていないのではないでしょうか。地元企業がしっかり収益を上げれば、そのような人たちを食い止められるのではないでしょうか。せっかく北九州市にきて、住みやすいまちとして感じているのに出て行くのはもったいないと感じています。

「九州第二都市として萎縮の必要はない」

私が小さかったころは本当に人が多かったという印象があります。一市民としても、人が来たくなる、住みたくなるまちにしていきたいと思っています。

北九州市は、なんといってもまだまだ九州第二の都市です。萎縮する必要はありませんが、ここで人口減少を食い止める必要があるでしょう。やはり「人口」は重要ではないでしょうか。